

20 向井元升と『紅毛流外科秘伝』

について

ヴォルフガング・ミヒェル

向井元升が通詞を介して出島蘭館医「アンス・ヨアン」に質し、『紅毛流外科秘要』を撰したことは、古賀十二郎がそれを紹介した後あらゆる年表、著作などで引用され、「定説」になっているが、その詳細および古賀氏が言及している写本の内容とその所在は不明のままである。

VOCの当時の文献を分析した結果、向井は一六五五年に大目付井上政重からの覚書に基づいて、膏薬や軟膏、薬油、薬草等について学んでいたことが明らかになった。また当時出島で勤務していた上級外科医はドイツ出身のハンス・ユリアン・ハンコ (Hans Juriæn Hancko) であった。一六五六、五七年の商館長ヴァーゲネルの在任中もそのハンコによる授業はさらに続けられ、その際、二部にまとめられた書物にはハンコとヴァーゲネルが署

名して保証している。江戸へ持参していたその一冊もハンコのヨーロッパの医書もすべて明暦の大火で焼失した。ハンコの後任者のもとで向井が改めて三週間に亘って指導を受け、長崎に残っていたもう一冊をさらに補充し、それを江戸へ送った。

向井及びこの作業に携わった通詞全員が関係資料を所有していたので、その形跡が所々に残っている可能性は高い。書物を探すうちに私はまず九州大学所蔵の『阿蘭陀伝外科類法』を見つけた。その主な項目は「インハラストノ類」、「エングエントノ類」、「ヲウリヨノ類」、「フロウリスノ類」、「根之類」、「葉之類」であり、その一部はアムステルダム薬局方によるものである。巻末には証明書とヴァーゲネル、ハンコの名前が見られる。これは商館日誌の一六五七年一月一日付の記述と完全に一致する。

『阿蘭陀伝外科類法』にはまた、『證治指南』という書が一冊束ねられている。腫物の列挙のしかたやその名称から、中国人陣実功の『外科正宗』が想起され、恐らくそれは上記の江戸の「覚書」の影響であろう。ハンコは

自分が理解できたと思つた腫物にはヨーロッパ式の名前をつけ、若干の説明を加えている。このテキストも他の向井に遡る書物の中に多く見いだされる。

さらに重要な書としては酒井シヅ氏によりすでに紹介されている河内家(千葉県)の写本がある。これは内容的にかなり広範囲なものに及んでおり、上述の書をほとんど含んでいる。その他には慶大の『阿蘭陀外療集』、京大の『阿蘭陀外科書』、東洋文庫の『阿蘭陀外科正伝』、九大の『阿蘭陀療治書』、宗田一所蔵の『阿蘭陀油』、京大の『紅毛外科書』、及び『阿蘭陀外科指南』等にもハンコが教授した形跡が見られる。以上の他に古賀の言う文書と一致する『紅毛流外科秘要』の写本を九州大学で見出した。

これらの文書と比較すると次のようなことが明らかになる。(一)古賀氏が指摘している『紅毛流外科秘要』は向井の報告書に遡る前述の諸文書の中の一冊に過ぎない。また、『紅毛流外科秘要』には他のほとんどの書に含まれている重要な部分が欠けているし、カスパル流外科などの系統の違うものも混ざっている。(二)『阿蘭陀伝外

科類法』は明らかに一六五七年一月の「第一の報告書」に由来するものである。「河内本」などでみられるその他の部分(『證治指南』、潰瘍と外傷の処方と治療法など)も向井元升がまとめたものと思われる。(三)腫物と疵の治療を説明する『證治指南』は檜林鎮山による「仕掛書」にも影響を与えているように思われる。出島の通詞たちはおそらく一般に手に入る限りの文書を集めたりしたのである。また、「アンス・ヨレアン」の軟膏薬は『阿蘭陀外科指南』(元禄六年)の刊行により一般に知られるようになった。(四)当時長崎にいた医師の河口良庵が演じた重要な役割は見過ごしてはならない。彼は通詞をよく知っており、また、その息子伝四郎は向井の弟子だった。河口は後に京都や大洲にも弟子を持つており、そのため彼が所持していた資料は地理的にかなり広く普及していた。

(九州大学言語文化部)